

柿生産量の飛躍的増加

【樹園地栽培と包装形態の変化】

「土手や畦での放任栽培から樹園地栽培へ」

昭和初期の世界恐慌で打撃を受けた養蚕業は、戦後も衰退の一途をたどりました。その結果、養蚕用の桑は次々と切り倒され、リンゴや梨、柿といった果樹園に切り替えられていきました。柿は、ほかの果樹にくらべて年間を通じて手間がかからないことから、新植が一層進みました。また、市田柿は乾燥期間が短くて済み、他県の干柿よりも早い時期に市場に出荷できることから市場での評価も上々で、柿農家の増加へ拍車をかけました。

ちように経済連や農協による共販体制が整い始めた時期とも重なり、名古屋の枇杷島市場や大阪の天満市場への出荷量は急増しました。自家用として定着していた干柿

づくりは、「市田柿は冬のボーナス」といわれるほどの高収入を農家へもたらすまでに成長したのです。

そんななか、高森町では養蚕から酪農へ転換し、市田柿と兼業する農家が多く見られました。耕地への新植（樹園地栽培）は、昭和三十五年（一九六〇）頃から急速に広がったといわれています。元々、下市田駅付近の第二段丘とその上の第三段丘には市田柿が多く植えられていましたが、栽培適地が標高五百五十メートル以下と拡大したのを受け、昭和四十年代には伊那南部広域農道（南信州フルーツライン）辺りにも新植されました。

こうして、「土手果樹」「放任柿」と呼ばれ、ほとんど手入れをされていなかった市田柿は、「よい干し柿づくりは、よい原料柿



樹園地栽培では、柿の木が整然と植えられている

昭和に入ると、紙の折箱も登場しました。紙箱も木箱も、組み立てた箱にワラを敷き、市田柿を二段または二段並べて、さらにワラを詰めてふたをしていたようです。もちろん、箱を組み立てるのは農家の作業でした。

戦後、共同出荷が主流になると、秀品は化粧箱、優品は半石箱（石油箱の半分の大きさの木箱）、良品は石油箱（石油の一斗缶が二つ入る大きさの木箱）に詰め、それぞれをバラ（二個単位）出荷するようになりました。木箱の組み立て作業は重労働な上、濡れないよう室内に保管しなくてはならないなど不便な点が多く、さらに市場や小売店からは、「衛生的でない」「量り売りが面倒」といった苦情も寄せられ、包装改善は早急の課題とされていました。

そんな時に登場したのが、段ボールとセロハン袋です。段ボールは折りたたむので場所をとる心配もなく、組み立ても容易な点から一気に需要が高まりました。セロハン袋は、水分は通すが細菌は通さないという特徴を生かして採用されたものです。昭和三十二年（一九五七）にセロハン袋百五十g入り、段ボール



さまざまに移り変わる市田柿のラベルデザイン（高森町歴史民俗資料館所蔵）



昭和27年（1952）頃の干柿を化粧箱に詰める作業の様子（「高森町果樹のあゆみ六十年」より掲載）

ルに五十袋詰めへ統一が図られました。細長い筒状のセロハン袋に市田柿を詰めるのは煩わしい面もあったようですが、市場や小売店からは「衛生的で量のばらつきがなく、品質が一目でわかる」と好評で、これを引きに東京方面への出荷量が飛躍的に伸びています。

昭和四十八年（一九七三）からは、百五十gから二百gへと増量し、包装も手間のかけられないバック詰めへ移行しました。

袋詰めで出荷量は飛躍的に増加

生産から」のキャッチフレーズのもとに「樹園地栽培」へと変貌し、品質・収量ともに新しい一歩を踏み出すことになったのです。

市田柿の包装形態は、時代とともに様々に変化しています。

大正十年（一九二二）に上沼正雄らが初めて出荷した際には、杉板の化粧箱に二十五〜五十個詰めでした。杉箱は秋田杉を使い、米を接着剤に使って組み立てたという話も残っています。

なるほど!! 市田柿 ⑧

段ボール出荷と果実生産量増加の関係

段ボールは十九世紀のイギリスで開発され、日本では明治時代後期に製造されるようになりました。戦後、従来の木箱から段ボール箱へと変化したのは、朝鮮戦争での需要の高まりと、森林保護政策による木材不足の理由からといわれています。

元来、果実の出荷には丈夫な木箱が使われていました。しかし、木箱の組み立ては重労働な上、収穫期の農家では千個、二千個といった大量数の組み立てに追われたといいます。昭和三十年頃から、堅牢な段ボール箱が開発され、各地でリンゴの輸送試験が行われました。

段ボール箱での出荷が定着すると、出荷作業が楽になった分、栽培果樹の品種を増やして多角的果樹経営をすすめる農家が増えていきました。桃や梨の栽培農家では、収穫や出荷の時期が重なっている市田柿は敬遠されがちでしたが、現在では、梨と柿、桃と柿を複合で栽培する農家がいくつも現れ、果実の生産量増加につながっています。

